

CAGLIERO¹¹

カリエロ11

サレジオ会宣教ニュース N.90 - 2016年6月

サレジオ会宣教部門によるサレジオ会共同体・サレジオ・ミッションの友人のための通信



兄弟の皆さん、
友人の皆さん、

ストレンナ2016の光に導かれ、イエスと一緒に、聖霊のうちに、この宣教の旅を私たちは続けます。そのために、総長は今年、この世に共におられるイエスの現存を認めること、観想すること、活かすことを妨げるものを、大胆に告発するようにと招いています。サレジオの若者の教育において、この社会的愛徳の非常に具体的な次元へと方向づけ、それを奨励することは、必ずしもできていません。宣教する共同体の生き方のあかしは、第一の、最も雄弁な告発になります。この世が無関心と排除を促す一方で、共同体は受容、すべての人を排除することなく受け入れる姿勢をあかしします。例えば、私たちは、パキスタンの若者アカシュ・バシールの殉教の犠牲を今いちど思い起こします：それは、あらゆる形の宗教的非寛容に対する明確な告発でした。

聖霊の冒険を続けましょう！

J. Basanès

宣教顧問

ギジェルモ・バサニェス神父

イエスのいつくしみ深いみ心のうちに、 あらゆる病は癒しを見いだす

神のいつくしみの中で、私たちのあらゆる病は癒しを見いだします。神のいつくしみは、実際、距離を置きません：あらゆる貧しさと出会おうとし、実に多くのさまざまな隷属からこの世を解放しようとし、いつくしみは、癒すために、すべての人の傷に手を伸べ触れたいと願います。いつくしみの使徒になるということは、今日、私たちの多くの兄弟姉妹の体や魂をさいなむ傷に触れ、その苦しみを和らげることです。その傷を治しながら、私たちはイエスを告白し、イエスが共におられ、生きておられることをあらわにします；自らの手でイエスのいつくしみに触れる人々が、使徒トマのように、イエスを“主、神”（ヨハネ20・28）と認めるようにします。それが、主によって私たちにゆだねられる使命です。実に多くの人々が聞いてほしい、理解されたいと願っています。私たちの日常の中で宣べ伝えられ、記されるいつくしみの福音は、忍耐強い開かれた心で人々を探し求めます、兄弟姉妹一人ひとりの神秘の前で、愛の共感と沈黙を理解する「善いサマリア人」です。いつくしみの福音は、惜しみなく広い心の喜びあふれる僕、何も報いを期待せず、無償で愛する人々を必要とします。

教皇フランシスコ

2016年4月3日 神のいつくしみの主日説教



先住民族の人々と共に、 神の呼びかけを日々見いだしています



私

の海外宣教師としての修道生活は、サムエルへの神の呼びかけに少し似たかたちで始まりました。エリの助言によって、少年サムエルは神の呼びかけに気づきます：「主よ、お話してください、僕は聞いております。」（1サムエル3・9）

子どもの頃から私はある呼びかけに気づきましたが、誰が呼んでいるのか、何に呼ばれているのかわかりませんでした。志願期、修練準備期、修練期、ポスト・ノビスの間、サレジオ会宣教師の宣教活動についてニュースを聞く機会が多くあり、いつか自分もサレジオ会宣教師になれるだろうかと思いを巡らせていました。修練期のとき、宣教師になりたいという望みを修練長に話しました。それから哲学の3年間、海外宣教師になりたいというこの望みについていつも院長と話し、院長はサレジオ会宣教師の召命の識別を導き、同伴してくださいまし

た。

2012年、総長は私をベネズエラに派遣し、私は6か月間スペイン語を学んだ後、アマゾナスに送られ、そこで実地課程生として2年間働きました。先住民族の人々の中での生活は、食べ物、言葉、日常生活のさまざまなこと、ひと言でいえば文化の違いのため、驚きの連続でした。新たな文化の中で生活した最初の数か月、私はカルチャーショックを経験し、生まれてこのかた想像したことのないようなことがいろいろありました。

アマゾナスへ行く前、カルチャーショックを恐れないようにと多くの人が助言してくれましたが、新しい言葉で話をしたり、しゃべったり、コミュニケーションを取る難しさ……それは大きなストレスになりました。

来る日も来る日も、サレジオ会員の助けと活気づけをもらい、アマゾナスの人々に親しく、温かく受け入れてもらいながら、このショックに対処するよう努力しました。そして何よりも、2011年9月、ローマで新宣教師のための研修コースに参加したときに書いた日記を読み返しました。再び目を通し、振り返り、自分の経験や振り返りを分かち合いました。このようにして、難しい時も落ち着いていることができました。私は少しずつ落ち着いてカルチャーショックに対処できるようになり、神の限りない恵みをはっきり認識できるようになりました；あらゆる状況、あらゆる場合に、神はいつも共にいてくださるのだと。祈りの生活と神との一致は本当に大切だと私は確信しています。なぜならそれは、人生の困難な時を乗り越えさせてくれる動機の源泉だからです。

私はアマゾナスの先住民族、ピアロラとジバの人々の中で、宣教師として幸せで満ち足りています。「サレジオ会宣教師は、これらの国民がもつ長所を取り入れ、彼らと苦悩や希望を分かちあう」（会憲第30条）。この人々の文化は豊かで、感動的なものだと感じました。彼らは私の宣教師としての生活の一部です。彼らと共に歩みながら、自分への神の呼びかけも、日々見いだしています。

ベトナム出身、ベネズエラ、アマゾナスの宣教師 ジョゼ・ファン・アン・トゥアン神学生



サレジオの宣教の聖性のあかし

サレジオ会列聖申請人 ピエル・ルイジ・カメローニ神父

福者ルイジ・ヴァリアラと共にイエス・マリアのみ心修道女会を創立した神の僕 アンナ＝マリア・ロザーノ（1883-1982）は、1968年の回状に書いています：「神なるイエスのみ心は、いつでもご自分の愛と大いなるいつくしみで私たちを満たそうとしておられます。私たちは日々、ますます、イエスの至聖なるみ心のご加護と限りない優しさを感じます。惜しみなく応えなければなりません！「愛の負債には愛をもって。」



サレジオ会の宣教の意向

全サレジオ会の養成支部が、
イエスのみ心からインスピレーションを汲むものとなりますように。

養成を受けているすべての人、すべての養成担当者、すべての養成支部をイエスのみ心に奉獻することは、私たちの会にしっかり根付いた伝統ですが、新たに力を入れる必要もあります。この確信と遺産は、宣教師たちによってすべての大陸にもたらされました。初期養成を受けているすべての若い会員が、ドン・ボスコの子としての修道奉獻と宣教の熱意の源泉と模範を、イエスのみ心のうちに見出すことは緊急に必要です。

